

高齢者医療の行く道

院長 長山 直弘



アボリジニーと呼ばれるオーストラリアの原住民はおよそ3万5千年前にオーストラリアに渡ったと言われます。アボリジニーは老人になると、それまでの家族や社会に取り囲まれた生活を捨てて、一人で山の中に入っていき、そこで孤独な瞑想の修行を行うのだそうです。彼らは岩の上に座り込み、目を青空に向け呼吸を整えながら、じっといつまでも青空を見続けるという修行に、一日の多くの時間を費やすのだそうです。一切の思考を停止し、社会生活の思い出から離れ、宇宙に遍満する力の流れが自然に自分に入り込んでくる体勢をとるのです。宇宙的な力の流れを体験し、それは肉体の次元とは異なるものであると実感し、来るべき死を乗り越えようとするのだそうです。

入院しておられる高齢者は、元病の悪化と老化によって、次第に色々な身体機能が失われ、認識と意識に関係する多くの身体領域も障害されていきます。単純に呼吸を繰り返しているうちに日々そのようになっていきます。その過程で穏やかな性格・穏やかな雰囲気になっていかれる人は多いです。入院生活が一種の瞑想になっている、と思えることはよくあります。身体は衰えていくけれど、呼吸と共にその人の存在のうちのどこかの部分が整えられ、清められているのではないのでしょうか。

高齢者医療において医療経済や家庭内介護力など的高齢者を取り巻く問題は大きな部分を占めます。しかし高齢者自身のこと、死への旅立ちの準備の時であるという視点を深めることが最も大切で、その手助けができるようになるためにはどうすればいいのか、旅立つ先の世界というものはあるのか、あるとすればそれはどのような世界なのかということの探求が、客観的な事実の探求が、これから的高齢者医療従事者に求められているのではないのでしょうか。

このことは特にも世界の中で高齢者社会の先頭を走る日本に与えられている使命のように思います。この方面への探求は平和を作り出すために大切なことだと思います。